

め汗ですぐに流れてしまします。いろいろ工夫し、墨の中に油を入れて練って顔に塗っていました。主人は「まるで、お芝居のお岩さんのようだ」と言っていました。そんな日が、何日も続きました。

その日は雨で、少し油断していましたが、トイレに入っていると、足音がしてきました。主人がソ連兵と大きな声で話をしながらやってきました。私は、とつさに仕切り板にしがみつきました。主人は、トイレの戸を開け、中を見せているようです。「ハラショー、ハラショー」と言つてソ連兵は帰って行きました。

「もう、出てきなさい」と主人に言われ、慌てて娘を探しました。私たちの心配をよそに、娘は押入れのカヤにくるまり汗びっしょりでスヤスヤ寝息をかいていました。

やがて冬が近づき、全員が集まつて暮らすことになり、長屋に移りました。

娘は才さんという朝鮮の人に預かつてもらい、私は床下に隠れ住むことにしました。目の前をソ連兵の足音が通りすぎます。外に出るのも時間を決められました。

お金も使えません。品物を持って行き、ソ連の女性兵士に買ってもらいます。朝鮮の人に見つけられて取り上げられたり、やつと買ってもらったお金の半分を同じ日本人に取られたりと、人が信用できなくなり、毎日、泣き暮らしていました。

そのような中でも、優しい女性兵士がいて「娘のみやげに」とブローチ一つを、一週間も食べられるお金で買ってくれました。また、若い男性兵士が、ネックレスを「これは、

世界を丸く仲良くつなぐ輪だ」と言つて高く買ってくれたこともありました。

ある日、私は「日本人、日本に帰れ」と幼い朝鮮の子どもに石を投げられ、頭を抱えて道路に座り込みました。

「何をするか」と怒鳴る声に、おそるおそる頭を上げ「あつ、父さんと、私は大きな声を上げました。そこに、あごひげの長い父の優しい姿を見たような錯覚をしました。

実際は、年をとった朝鮮の男性でした。肩を優しく叩き「一緒にいてきなさい」と言われ、私は無気力に従いました。

ふと我にかえると、立ち止まりました。男性は、私が恐れていると思つたようで「安心しなさい。私はあなたに心配するような者ではありません